棕櫚の主日礼拝説教 「祈りの家への招き」

日本基督教団石神井教会　2019年4月14日

【旧約聖書日課】イザヤ書　56章1～8節

1 主はこう言われる。正義を守り、恵みの業を行え。
わたしの救いが実現し、わたしの恵みの業が現れるのは間近い。
2 いかに幸いなことか、このように行う人、それを固く守る人の子は。
安息日を守り、それを汚すことのない人、悪事に手をつけないように自戒する人は。
3 主のもとに集って来た異邦人は言うな、主は御自分の民とわたしを区別される、と。
宦官も、言うな、見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。
4 なぜなら、主はこう言われる、宦官が、わたしの安息日を常に守り
わたしの望むことを選び、わたしの契約を固く守るなら
5 わたしは彼らのために、とこしえの名を与え、息子、娘を持つにまさる記念の名を
わたしの家、わたしの城壁に刻む。その名は決して消し去られることがない。
6 また、主のもとに集って来た異邦人が、主に仕え、主の名を愛し、その僕となり
安息日を守り、それを汚すことなく、わたしの契約を固く守るなら
7 わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き、
わたしの祈りの家の喜びの祝いに連なることを許す。
彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら
わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。
わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。
8 追い散らされたイスラエルを集める方、主なる神は言われる
既に集められた者に、更に加えて集めよう、と。

【福音書日課】ルカによる福音書　22章39～53節

39イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。
40いつもの場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と
言われた。41そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。
42「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いで
はなく、御心のままに行ってください。」〔43すると、天使が天から現れて、イエスを力
づけた。44イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落
ちた。〕45イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、
彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。46イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘
惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」

47イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に
立って、イエスに接吻をしようと近づいた。48イエスは、「ユダ、あなたは接吻で人の子
を裏切るのか」と言われた。49イエスの周りにいた人々は事の成り行きを見て取り、「主
よ、剣で切りつけましょうか」と言った。50そのうちのある者が大祭司の手下に打ちかか
って、その右の耳を切り落とした。51そこでイエスは、「やめなさい。もうそれでよい」
と言い、その耳に触れていやされた。52それからイエスは、押し寄せて来た祭司長、神殿
守衛長、長老たちに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって
来たのか。53わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下
さなかった。だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。」

「わたしは毎日一緒にいた」

受難節の最後の日曜日、「棕櫚の主日」を迎えました。今日から始まる「受難週」を、代々の教会はどれほど大切にしてきたことでしょうか。「聖なる一週間」と呼ぶ人たちもいるのです。わたしたちの主イエスが地上を過ごされた最後の一週間、弟子たちを伴われてエルサレムの町に入られ、十字架への道行きを進まれたときを辿らせていただく一週間です。

この日曜日を「棕櫚の主日」として記念するために、礼拝の初めに皆で「シュロの枝」を振りかざしながら行進をして入堂する、という習慣が古くから知られています。そのような入堂行進をしなくても、多くの教会が、この日には聖壇に「シュロ」かそれに類する植物の葉を飾るなどして、この日が「棕櫚の主日」であることを思い起こさせるようにしています。主イエスがエルサレムに入られたとき、人々が「**なつめやしの枝をもって迎えに出た**」（ヨハネ 12:13）と伝えられているからです（もっとも、ルカ福音書はそのことに触れていませんが）。「シュロ」は、主イエスをお迎えすることの象徴です。「**主の名によって来られる方、王**」（ルカ 19:38）をお迎えするしるしなのです。

わたしたちも、今日、あらためて主イエスをお迎えいたします。わたしたちの中の「エルサレム」に、主イエスをお迎えするのです。主イエスの時代のユダヤ人にとって「エルサレム」は、最も大切な場所を意味しました。「心のふるさと」と言ってもよい場所でした。わたしたちにとっての「エルサレム」は、どこでしょうか。一番大切な場所は、どこでしょうか。そこに、わたしたちは、主イエスをお迎えいたします。わたしたちの「心の玄関」でお迎えして、そのままお帰りいただくわけにはいきません。「応接間」にお通しするだけでも十分ではない。「この家は、あなたの家です。いつでも、どの部屋にでも入ってくださってかまいません。自由に出入りして、わたしと一緒に過ごしてください」とお迎えいたしたいのです。

わたしたちは、そのためにこそ、受難節の四十日を過ごしてきました。主イエスをお迎えするために、**主の名によって来られる方**として歓迎するために、今日の日に備えてきました。今日、この礼拝に集われた皆さんの中に、主イエスはおいでくださっているのです。

もちろん、中には「歓迎します」と心から言えない方もいらっしゃるかもしれません。「主イエスがおいでくださっている」と言われても、「何のことやら分からない」と思われている方もあるでしょう。それどころか、わたしたちが「主イエスを歓迎しましょう」と言えば言うほど、むしろ逆に拒絶反応を覚えられる方も、あるかもしれません。

確かに、主イエスがエルサレムに入られて最後の一週間を過ごされたときにも、拒絶する人たちは少なくなかったのです。殺意を抱いた者たちもいました。それでも、その人たちとも、主イエスは毎日一緒にいて、過ごされたのです。歓迎する者とも、拒絶する者とも、「**わたしは毎日…一緒にいた**」と、主イエスはおっしゃるのです。

いつものように、いつもの場所で

弟子たちにとって、主イエスと一緒にいるというのは、当たり前のことだったでしょう。これまでに何年も主イエスと寝食を共にしてきた弟子もいました。きっと、弟子たち自身がそうしたいと願って、主イエスと一緒に過ごしてきたのでしょう。翻ってわたしたち自身のことを考えてみると、週に一度、日曜日の朝に一時間、主イエスとお会いできれば十分、と思っているところがあるかもしれません。礼拝中に開いた聖書が閉じられ、後奏が鳴りやむころには、すでに主イエスのことは意識にも上らない、というのが本音かもしれません。実のところあの弟子たちでさえ、主イエスから離れることになるときを経験したのです。

弟子たちが主イエスと一緒にいることができたのは、木曜日の晩、最後の晩餐を終えて、オリーブ山で主イエスが祈られたときまででした。そこに、主イエスを捕えようとする者たちがやって来て連れて行かれてしまうと、弟子たちのほとんどの者は、もはや一緒について行くことはなかったのです。

その、弟子たちとの最後を過ごした祈りのひとときは、しかし、特別なものではなかったようです。それは、「**いつものように…いつもの場所で**」なされたものだったというのです。

確かに、主イエスが弟子たちを伴って祈られるのは、いつものことでした。主イエスは、いつも祈る姿を弟子たちにお見せになられていました。一人どこかに籠って祈られることもあったのでしょうが、弟子たちのいるすぐ傍で祈られて、その姿をお示しになられるというのが日常的な主イエスの振る舞いでいらしたことを、わたしたちは思い起こすことができます。

主イエスは、もちろん、弟子たち自身が祈ることもお教えになられました。祈りの言葉もお教えくださいました。わたしたち教会が受け継いでいる「主の祈り」は、そのような祈りの一つです。主イエスが口伝てに弟子たちにお教えくださり、一緒に祈ることができるようにしてくださったのです。

けれども、主イエスがご自分の祈りをなさるときに、弟子たちにも一緒に祈るように促されたり命じられたりしたことは、案外少なかったのかもしれません。福音書には、弟子たちが主イエスの傍らで祈ったというようなことは、伝えられていないのです。弟子たちは、主イエスがいらっしゃるところでは、祈らなかったのでしょうか。あるいは、祈れなかったのでしょうか。いずれにしても、そのような弟子たちに祈りを強いることは、主イエスはなさらなかったのです。

そのかわりに、主イエスはご自分の祈りの場に、弟子たちを伴われたのです。ご自分の祈りの声の響きの中に、弟子たちを置かれたのです。それが、いつものことでした。いつもの場所で、主イエスは、いつも、そうなさったのです。

主イエスの祈りの言葉の響く中を、弟子たちは過ごしてきたのです。ときにはその主イエスの祈りの言葉をなぞって唱和するということもしながら、主イエスの祈りの言葉が響くところに、弟子たちは、いつも置いていただいていたのでしょう。主イエスは、むしろそのようにして、ひたすら祈りの言葉を聞かせることによって弟子たちに祈りを教えられた、ということなのかもしれません。

「祈っていなさい」

その弟子たちにとって、主イエスの最後の日々にお聞かせいただいた祈りの言葉は、特別なものとなったのではないでしょうか。中でも、主イエスが弟子たちを伴っていつもの場所で、いつものように祈られた、オリーブ山での最後の祈りの言葉は、弟子たちの耳に深く刻まれたものだったのに違いありません。

「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行なってください。」

いつもならば、主イエスがどのような言葉で祈っていらっしゃるのか、気にも留めずに聞き流してしまっていたかもしれません。しかし、このときばかりは、違いました。いつもの場所で、いつものように祈りをなさると思っていたところで、主イエスは、おっしゃられたのです、「**祈りなさい**」と。いつもならば、傍らで居眠りをしていても、何も咎められることもなかったのかもしれません。ところが、このときは違いました。「**なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい**」と、繰り返しおっしゃられたのです。

弟子たちは、祈れませんでした。主イエスの祈りが苦しみ悶え、いよいよ切に祈られるものであったのを見て、弟子たちは、途方に暮れたのかもしれません。悲しみの果てに眠り込んでしまうような状態でした。「起きて祈っていなさい」と命じられても、とても自らの心から祈りの言葉を取り出すことなどできない。表面上だけでも取り繕った祈りの言葉を唇に乗せるようなことも、できない。そもそも、これまで「祈りなさい」と命じられることなど、ほとんどなかったのです。けれども、そうであればこそ、弟子たちは、このとき、「祈りなさい」と命じられながら祈れない中で、主イエスの祈りの言葉をはっきりと耳にし、心に刻むことになったのではないでしょうか。そうであればこそ、このときの主イエスの祈りの言葉は、弟子たちによって伝えられ、聖書に記され、わたしたちにまで受け継がれるものとなったのではないでしょうか。

もはや、主イエスは捕らえられていってしまいます。裁判にかけられ、有罪判決を下され、十字架刑に処せられてしまうでしょう。もはや、主イエスの口から祈りの言葉を聞くことはできません。主イエスの祈りの響きを、直接耳にすることはできません。

けれども、弟子たちは、その主イエスの祈りの言葉を受け継ぎました。その祈りの響きを、自分たちの口をもって、その唇をもって、響かせることができるのです。そうです。この弟子たちの一人、シモン・ペトロは、直前に言われていました、「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ 22:32）。兄弟たちを力づける方法は、一つです。主イエスが祈ってくださったように、祈るのです。祈ることのできない者の傍らで、主の祈りの言葉を自分の唇で響かせて聞かせるのです。わたしのために祈ってくださった主イエスの祈りの言葉は、わたしの傍らに共にいるあなたのための祈りとなるのです。主イエスの祈りの言葉がこだまする「祈りの家」に、わたしたちは皆、招かれて来ているのです。